

くにたち しらべ



NO. 11

発行日 2012 年 3 月 31 日
編集＝くにたち図書館地域資料ボランティア
発行＝くにたち中央図書館

テーマ

『くにたちの地名』シリーズ 1 くにたちのなりたち

1. はじめに

くにたちにはいろいろな地名があります。東や北のようにあとから付けられた地名はわかりやすいのですが、昔からの地名には読み方が難しいものもたくさんあります。南武線から南の谷保地域には特に多く残っています。そこでどうしてこのような名前がついているのか、地名の成り立ちを調べてみました。このシリーズではテーマごとに順に紹介します。

地名は、地域の自然やそこで暮らす毎日の生活と大きなつながりがあります。人口が増えまちが発展していく中で昔からの地名が消えたり変わったりすることがありますが、それでは私たちのまちの歴史＝記憶を消してしまうことになります。地名が変わっていくようすを残すことで、まちの歴史と歴史を作ってきた人たちの苦勞がわかります。

この「くにたちの地名」シリーズで紹介し、載せている地名については、みなさんもぜひその場所に行ってどんなところなのかを自分の目で確かめてください。そうすることで自分のまちの成り立ちや地名の歴史にもっと興味がわき新しい発見もあることでしょう。

シリーズの最初では、くにたちの地名の中心である谷保から現在の国立となる中で、どのような歴史の流れがあったのかを取り上げます。くわしい地名についてはこのあとのシリーズで順に載せていきます。またわかりやすくするために、どのシリーズにも共通する

- ・参考とする図書 (引用は*○○・P○○)
- ・理解を深めるための語句 (#○○)

を最後につけました。

読み方や漢字で書くときも、時代によって変わり、参考にした資料で違うものがあります。地名の中で代表的な「谷保」と「四軒在家」、「峰」は、本の文章をそのまま載せたもの以外は、できるだけ下にしたように統一しました。

古くからの資料を見ると、読んだり書いたりするうちに違いが出てきて当て字（耳で聞いた言葉を適当な字で当てはめたもの）もあるため、同じ言葉なのに複数の語句が残っています。同じ地名でも時代で変わることがあるので、その違いを知っておくと便利です。このシリーズでは、古い歴史の中で全部を調べて一つにしぼるのはとても難しいために、いろいろな言い方があることを紹介するだけにしています。

（読みについて）

「谷保」は、シリーズ2でくわしく説明していますが、“やぼ”（ヤボ）で統一しました。わかりにくいときはふりがなをふっています。

「四軒在家」は、シリーズ3に載っていますが、地名がついたころは“しけんざいけ”と呼ばれていましたが、四軒在家公園看板などを見ると最近は“しけんざけ”となっていますので、ここでは“しけんざけ”を使っています。

（字体）

小字（地域^{こあざ}の一番小さな区画）の「峯」が「峰」に、「之」は「の」「ノ」「乃」などに変っています。「峽」は「峯」^{さき}も使われています。ここでは資料を引用したものはそのまま載せ、書き加えたところではできるだけ「2007版 国立全図」の書き方にあわせて、「峰」、「之」、「峯」で統一しました。

（シリーズ内容）

1 くにとたちのなりたち

現在の国立市となった歴史を記し、地名発生の大きな流れについて説明しています。

2 くにとたちの地名：国立・谷保・青柳・石田・矢川

大字（小字^{こあざ}より大きな区画）と、矢川地名について書いています。

3 くにとたちの地名：上谷保・下谷保のむら

4 資料に載っている地名

『延宝^{えんぼう}検地』、『元禄^{げんろく}検地』、『谷保^{やぼ}案内』などにでてくる地名について書いています。

5 くにとたちの地名：小字（市制施行前）

町制（国立町）、市制（国立市）の前の字名について書いています。

6 くにとたちの地名：小字・町名（市制施行前後）

くにとたちが国立町や国立市になるころの地名の読み方について書いています。

7 くにとたちの地名：道・坂編

市内の道、坂などについて書いています。

8 くにとたちの地名：川・橋・水・公園編

市内の川、用水、堰^{せき}、公園など水に関係する名前について書いています。

2 国立市 沿革

2-1 概要

東京都のほぼ中央にあり、北は国分寺市、東は府中市、西は立川市、南は府中市、南西は多摩川を隔てて日野市に接しています。市域は三つのハケ#1（崖線#2）と多摩川とにはさ

まれた三つの平地からなります。もっとも低い低地は多摩川と青柳段丘#4崖線との間にある沖積地#5で、次いでその崖線の上に青柳段丘、さらにその上の立川段丘崖線上に立川段丘があり、その上は国分寺崖線となっています。かつての谷保田圃は沖積地に広がっていました。（*22）

大正時代までは、その大半が田畑と山林でした。

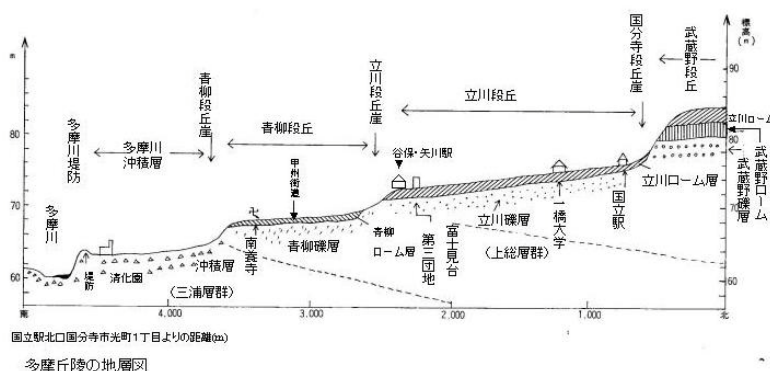


図 2-1 多摩丘陵地形断面構造図 (*2 上巻)

2-2 原始・古代（1世紀初頭ないし3世紀から12世紀末、奈良・平安時代）

遺跡は立川段丘と青柳段丘縁辺に集中しています。旧石器時代#6の遺跡には富士見台三丁目も峰上遺跡に含まれ、縄文時代#7では、下谷保遺跡、南養寺遺跡、古墳時代#9では仮屋上遺跡、下谷保遺跡、四軒在家遺跡などから発掘されています。

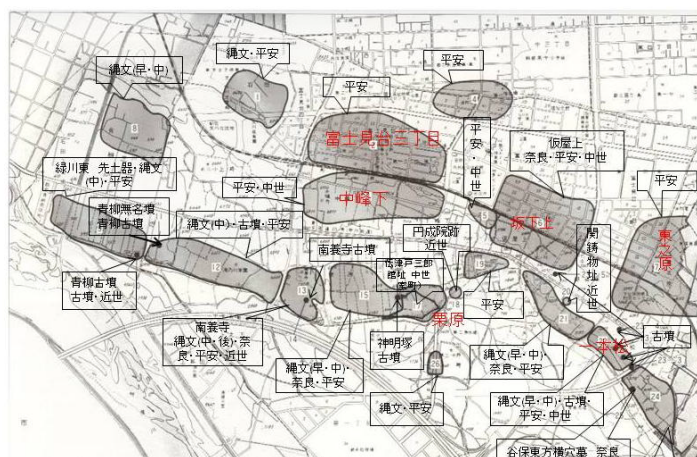


図 2-2 国立市域埋蔵文化財分布図

(*2 上巻 P491 に追記)

律令制#10下では、武蔵国#11におかれた21の郡のうち多磨郡#11-1（多磨郡）に属し、隣接する府中や国分寺には、武蔵国府武蔵国分寺がおかれて武蔵国の中心地でした。『和名類聚抄』#31に記載される小楊郷#12を市域ではなかったかとする説もありますが、確定する史料はありません。（*22）

2-3 中世（12世紀末鎌倉幕府の成立から16世紀末室町幕府滅亡まで）

中世の市域は古多摩川（現在の矢川流域）の北岸に沿ってその段丘上に西から府中に至る交通路（のちの甲州道中）によって連結されていました。北部地域は武蔵野の山林と荒蕪地（あれはてて雑草が生い茂っている土地）に覆われてほとんど人家がありませんでした。中世の人々の生活の痕跡を示す板碑^{いたひ}#13は南部の南養寺（1307年建立）を中心とした栗原地区、城山（三田館址：伝津戸三郎館址^{つのと}）地区、上谷保の谷保天満宮地区、下谷保地区の4カ所に集中し、ここに鎌倉時代末から室町時代の領主や住民の生活が営まれていました。（*22）

（谷保の地名の初見）

弘安3（1280）年に留守所の役所が、前年度の国衙^{こくが}#23の倉庫に納めるべき5升米の員数を書き上げた記録（『国庫納米員数注文』、金沢文庫所蔵文書）の中に、谷保に三石五斗九合の米が散用（納税と考えられる）されたとあります。谷保の地に村落が形成されていたのでしょう。（*2 中巻・P34）

2－4 近世（安土桃山時代、江戸時代）

市域は正保一慶安期（1644－52）には武蔵国多摩郡谷保村・青柳村の二村がありました。江戸時代初期に多摩川に近い低い沖積地を通っていた甲州道中は、17世紀前半に青柳段丘上に移動しました。ほぼ同じくして、対岸の石田村（現日野市）からも移住者がおり、それぞれ青柳村、石田村飛地として成立したものとみられます。寛文11（1671）年には青柳村が多摩川の南岸から北岸の現在地へ移転しました。こうして17世紀後半、甲州道中を中心にした谷保・青柳・石田三村の細長い集落が形成されました。（*22）

（谷保村の分村と新田開発）

天和3（1683）年に谷保村が上谷保と下谷保とに分けられました。南半分は多摩川に接し、半分は四ッ谷村に接し、北は中藤新田^{なかとう}・榎戸新田^{えのきど}（現国分寺市）に隣接しています。以降市域は武蔵国府中領の上谷保村・下谷保村・青柳村の3カ村およびその持添新田^{もちぞえ}#13-2と、日野領石田村（現日野市）などの入会^{いりあい}#14の新田^{きようほ}#15（石田新田）で構成され、江戸時代を通じ幕府領でした。享保年間（1716－36）谷保村の代々の鋳物師の子である矢沢大堅^{やざわだいけん}（大堅については『くにたちしらべNo8』を参照）は、矢沢籐八らとともに百姓寄合^{ひやくしやうがひ}#16新田^{のなか}の野中新田（現小平市・国分寺市）などを開発しました。当初「矢沢新田」にしようとしたましたが、幕府冥加金を上納できず、野中新左衛門が出資者となり、村名が「野中新田」となりました。

下谷保村の百姓、遠藤平兵衛は平兵衛新田（現国分寺市光町近辺）を開発しました。（*5,P199,*22・759）

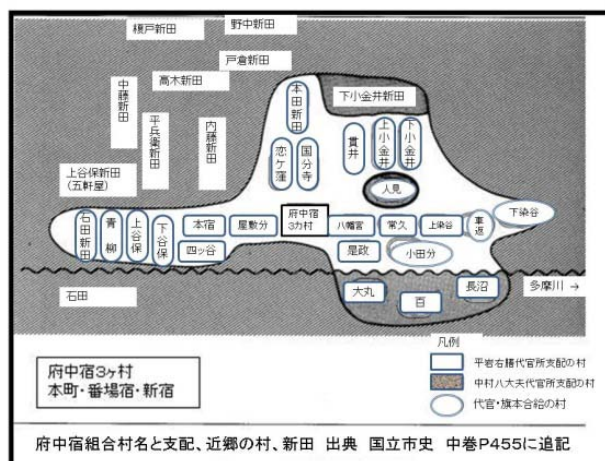
上谷保新田は、上谷保内の原野であったことで名付けられ、開発者は、中藤村の加藤忠右衛門とも、出作^{でさく}#16-1百姓によって開発された、上谷保村の持ち添え新田ともいわれます。（*2 中巻P376）

下谷保村新田もありましたが、延享4（1747）年以降あいっいで戸倉新田郷左衛門に売却され、戸倉新田に吸収されました。（*2 中巻, P379）。

（府中宿組合）

文政10（1827）年に府中宿を組合村#17寄場^{よりば}（大組合の中心となる村を寄場村とした）として25

ヶ村による府中組合が成立すると、図 2-3 府中組合村名と支配、近郷の村3ヶ村および石田新田が同組合に *2,中巻P455に追記組み込まれました。（*22・P759,*54）



2-5 近現代（明治時代以降）

（谷保村）

国立市域には江戸時代、行政村落として上谷保・下谷保・青柳・石田の4カ村があり、明治9（1876）年には、342戸がこの地域にあり、十のむらで成立していました。村は、甲州街道を挟んだ東西3kmほどの路村状の集落です。その家々の背後の畑、南の多摩川近くの水田、北部に広がる平地林とが、かつての村域です。

（山林田畑構成）

単位：町歩（歩＝約0.99h）

	谷保村	青柳村	石田村飛地	合計
田	99	4	0.1	103
畑	333	33	24	390
山林	173	46	4	223
合計	605	82	29	716
戸数	294	50	30	374
人数	1635	302	191	2128

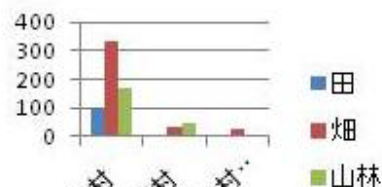
『谷保村誌』より

表 2-1 田畑構成

明治9年 大正13年

	明治9年	大正13年
宅地	0	2
田	102	111
畑	386	285
山林地	221	243
合計	710	642
戸数	374	462
人口	2128	3197

明治と大正比較表(単位ha)



明治9年田畑構成

明治9（1876）年と大正13（1924）年の各村の田畑構成は、表2-1のようでした。水田の大部分は谷保村に集中し、石田村の飛地の多くは畑でしたが、青柳村では山林が耕地の面積をうわまわっていました。甲州街道は寛文（1661～73）年間、ハケ下からハケ上へ、ほぼ今の位置に移ったと推定されています。さらに多摩川右岸、関戸（多摩市）の青柳島から移ってきたと言われる青柳村と石田村（日野市）の飛地#19からなり、青柳と混在の石田をへて、西は立川市域に至ります。（*20-3・P9）

これが明治22（1889）年の町村制施行に際し合併して谷保村^{やほ}となり、現在の国立市と重なる村としてひきつがれてきました。こうした行政村落とは別に、谷保地区（上谷保・下谷保）には近世以来八つの村組がありま

した。甲州街道に沿って西から東にむかって並ぶ旧上谷保村の矢川をはさんだ四軒在家、南養寺がある久保、城山がある中平・石神・千丑、谷保天神のある坂下の六つと旧下谷保村の下谷保・下組という二つの集落がこれにあたり、当地域ではこれを「講中^{こうじゅう}#37」



とか「町内^{ちやうない}」あるいは単に「組」と称し
 ました。(*20-3・P4)

さらに多摩川堤防に沿った河原地区があり、これらのむら名は公簿上（法令による土地台帳）にはなく、昔から伝えられた俗称として呼ばれていました。

(*4・P7)

(神奈川県に編入)

明治元（1868）年10月、当地域の旧幕府直轄（代官支配地）の村は、ひとたび伊豆の^{にらやま}韮山県に属し、同年12月に石田村（現日野市）が、同4（1871）年12月に上谷保・下谷保・青柳の三ヵ村が神奈川県に編入されました。

同8（1875）年、上谷保・下谷保が合併し谷保村となりました。地租改正^{#18}に際し、村境の地引をし、絵図^{#18-1}を作成しなければなりませんので、上谷保と下谷保は、地理が錯綜^{さくそう}して村境を、細かに区別することが難しかったために、上・下谷保村合併願いが出され認められました。(*2中巻P566)

(多摩郡分割)

明治11（1878）年、の郡区町村制施行により、神奈川県多摩郡は、西・南・北の三つに分割され、谷保・青柳の二村は北多摩郡に、石田村は南多摩郡に編入されました。

同17（1884）年に谷保、青柳、本宿、四ッ谷、中河原の5ヶ村があいより、組合村が組織されました。隣接する3村は右図の通りです。

(谷保村の統合)

明治22（1888）年の町村制施行により北多摩郡谷保村・青柳村および南多摩郡石田村飛地（石田新田）が合併して神奈川県北多摩郡谷保村となり、旧谷保村は、大字として残りました。

(東京府へ編入)

同26（1892）年、三多摩が神奈川県から東京府へ編入されたのに伴い東京府北多摩郡に属しました。

大正14（1925）年に箱根土地会社が谷保村北部地域の雑木林、約100万坪（約330ha）を買収。翌15（1926）年に開設された中央



図 2-5 隣接村

線国立駅の南方に、東京商科大学（現在の一橋大学）を中心に整地・区画した分譲地国立大学町を短期間に開発し、売り出しました。

（大字国立の誕生）

昭和18（1943）年に東京都制がしかれましたが、それに伴い昭和17年、東区・中区、昭和18年、「大字国立」とすることを決め昭和19年、「大字国立」が誕生しました。

（町制施行と国立町の命名）

昭和25（1950）年1月の町制施行に伴い、町名を「谷保」、「国保」か、村議会などで白熱論議の末、翌26年4月1日に「国立町」と決定しました。（*1・P206）

（文教地区指定）

風紀の乱れに危機感を持つ主婦らを中心に一橋学生、教授、青年らによる住民の、環境浄化運動を受けて、昭和27（1952）年1月に国立町の三分の一に相当する約85万坪（約280ha）の地域が、東京都条例、建築基準法（昭和25年法律第201号）にもとづき文教地区指定として全市町村のなかでは初めて認可されました。（*22,*52）

（市制施行）

昭和30（1955）年頃からJR南武線北側95万㎡の農地区画整理により、大規模な公団住宅の建設が進められました。富士見台団地建設は、昭和38（1963）年に着手し、昭和40（1965）年11月に完成、首都近郊のベッドタウンとして入居が始まりました。昭和40（1965）年10月の国勢調査で、国立町の人口が4万人を越え、市制への人口要件が整いました。さらに同年12月に、5万人を越えました。

昭和42（1967）年1月1日に市制施行され、都下で15番目の市、「国立市」となりました。同42年の、中央自動車道の開通に伴い、市の南端に国立府中インターチェンジが設けられ、かつての中心地谷保地区も交通の要衝として大きく変動しました。（*22,*2別巻）

2-6 現在（平成15（2003）年1月1日現在）（*25）

街作りの4つの地域に区分すると次のようになっています。（単位1ha＝10,000㎡）

地域	面積(ha)		人口		町名
北地域 中央線以北	59	7%	8,061	11%	北
東・中・西地域 中央線から江戸街道まで	269	33%	29,513	41%	東、中、西
富士見台団地 江戸街道から南武線まで	128	16%	18,547	26%	富士見台、
南部地域 南武線以南	359	44%	15,821	22%	谷保、青柳、石
崖線北側	170	21%			田、泉、矢川
崖線南側	166	20%			
市域合計	815		71,942		
外国人登録			1,318		
合計			73,620		
国勢調査 平成22年人口			75,505		

表 2-2 地域の構成（平成15年）

3 行政区分の推移

弘安3（1280）年、文献（4頁谷保の地名の初見の項を参照）に「谷保」の名がみえてから、現在にいたる行政区分をまとめると、字は図3－1のように推移してきました。

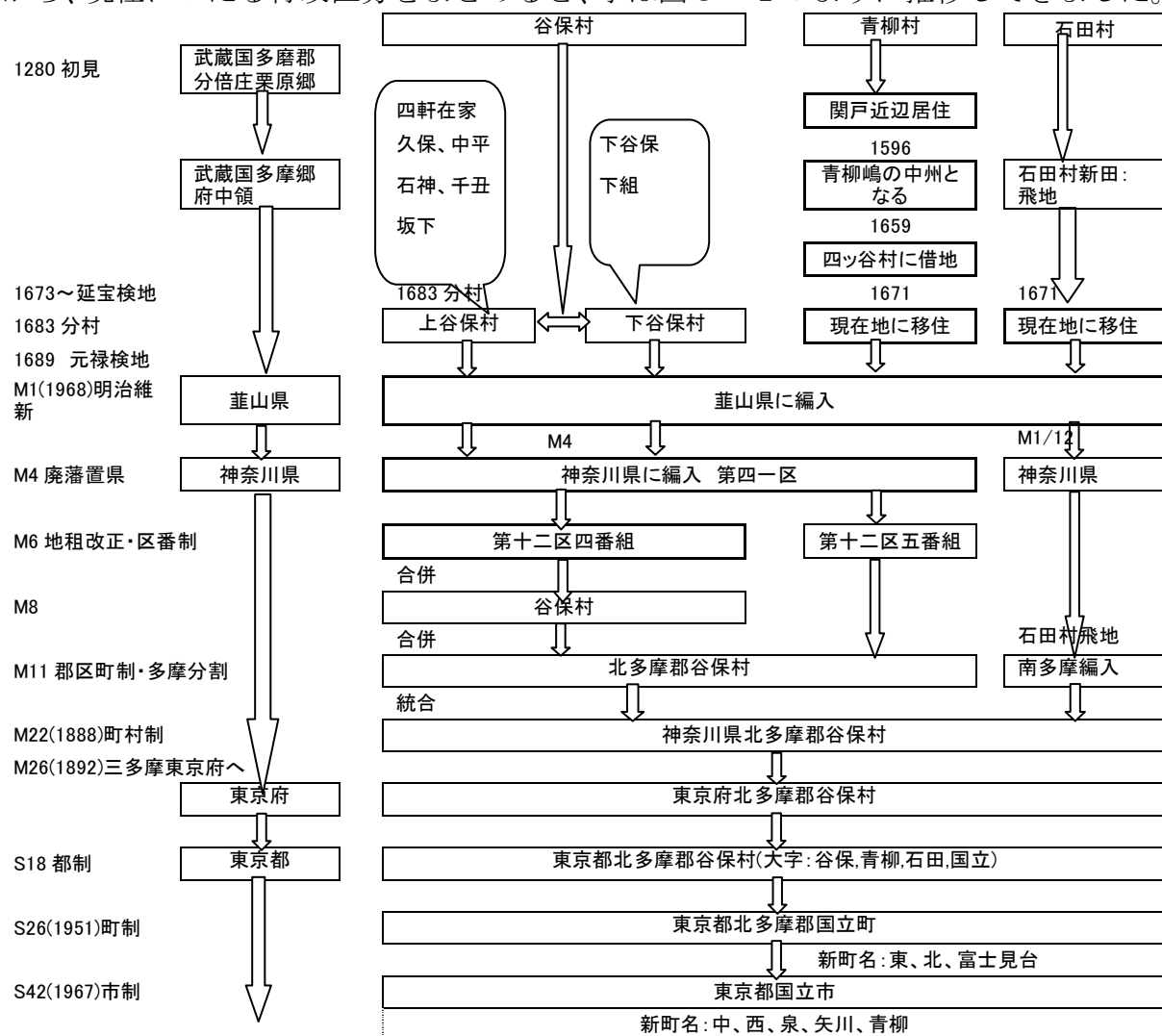


図3－1 行政区分の推移

4 地図にみる近現代の変遷

近現代の国立の発展の様子を地形図で、比較してみました。右図は明治15（1982）年に測量した地形図です。次頁の大正13（1924）年、昭和10（1935）年、昭和32（1957）年、昭和58（1983）年の地形図のように、大学町、富士見台団地、中央高速道の建設が、大きな変化の筋目となっていることを示しています。

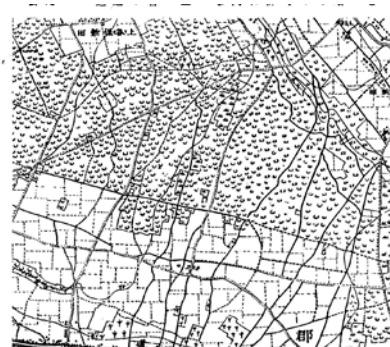


図 4-1 明治15年測量 2万分の1迅速測図「府中駅」を縮小



図 4-2 大正10年地形図 国土地理院

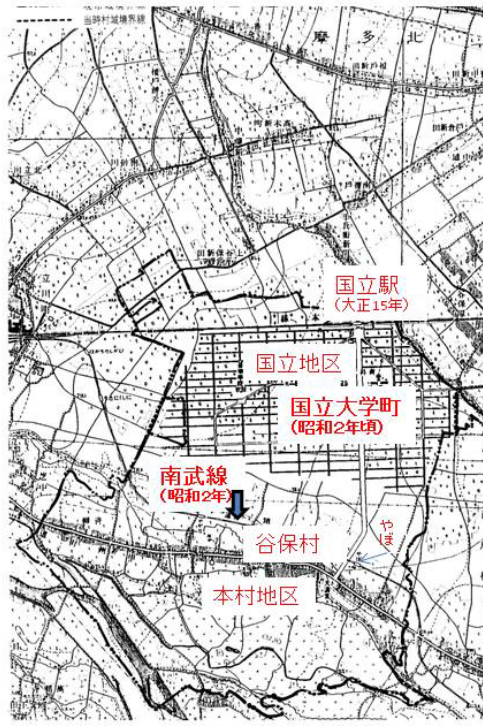


図 4-3 昭和10年地形図 国土地理院

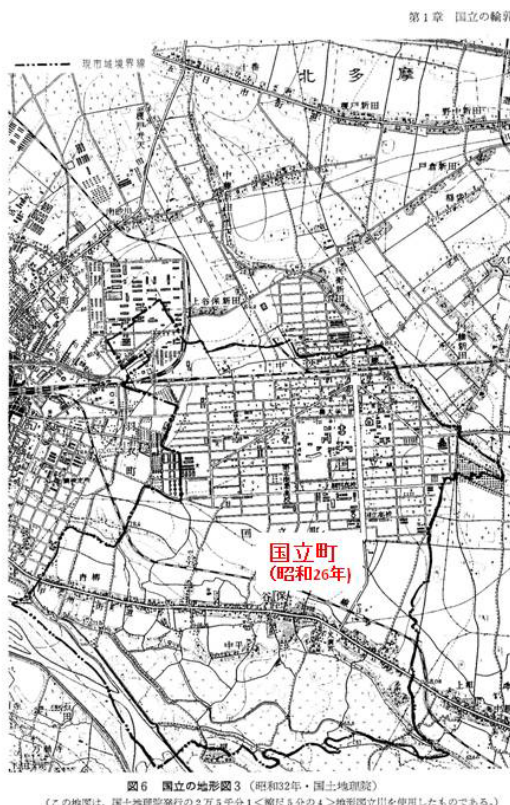


図 4-4 昭和32年地形図 国土地理院



図 4-5 昭和58年地形図 国土地理院

5 語句の説明・解説 (*数字は、引用文献を示す)

- #1 はけ (関東から東北地方にかけて) 丘陵山地の片岸。ばっけ。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]
ハケは岨、峽であり、高台に囲まれた谷合で水がよくはける所から謂われである。
- #2 崖線 長くつながった「がけ状」の地形をいう。これらの崖線は、開発によって地形が改変されたと
ころもあるものの、不連続ながら緑の帯につながり、市街地を緑で縁取る役割を果たし、また湧水も多
く、貴重な景観資源となっている。(*25)
- #3 湧水 【ゆうすい】 地下水が地中から地表、湖沼、海などに自然に流れ出る現象。崖線下に多く見
られる。(*25)
- #4 段丘 河川・湖・海などに接する階段状の地形。もとの氾濫原や浅海底であった平坦な部分と、その
前面に河川や海水の浸食によって形成された急斜面とから成る。(*11)
- #5 沖積地 【ちゅうせきち】 流水によって土砂が積み上がった土地。
- #6 旧石器時代【きゅうせっきじだい】 人類史上で最古の時代。ほぼ地質学上の更新世にあたり、人類
は、今日絶滅し、もしくは生息地をかえた動物とともに住み、打製石器や骨角器を用いたが、まだ土器
を作らず、採集・狩猟・漁労だけによって食糧をえていた。通常、前・中・後期に 3 区分される。日本
では縄文時代の前の時代がほぼこれにあたる。(*11)
- #7 縄文時代【じょうもんじだい】 縄文土器を用いた時代。更新世末期から紀元前 5 世紀までの約 1 万
年にわたり日本列島に続いた。土器をもとに、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の 6 期に大別される。(*12)
- #8 弥生時代【やよいじだい】 縄文時代の後、古墳時代の前の時代。その開始の指標を弥生土器の出現
とする考え方と、稲作の開始とする考え方とがある。紀元前 4 世紀頃から後 3 世紀頃まで。大陸文化の
影響を受けて水稻耕作や金属器の使用が始まり、銅剣・銅矛・銅鐸どうたくのほか鉄器も用いられる。
普通、前・中・後の 3 期ないし I～V の 5 期に分ける。(*12)
- #9 古墳時代【こふんじだい】 日本で壮大な古墳の多く造られた時代。弥生時代について、ほぼ 3 世紀
末から 7 世紀に至る。ただし、土盛りした墓は弥生時代に始まり、古墳時代以降も存続。畿内を中心と
して文化が発達した時期で、統一国家の成立・発展と密接な関係があるとする説もある。(*11)
- #10 律令制 【りつりょうせい】 大宝律令・養老律令に規定された諸制度。また、それら律令の修正増
補をも含む律令国家の諸制度。律令国家が形骸化した後も官制などは京都の朝廷に存続。令制。(*11)
- #11 武蔵国【むさしのくに】 埼玉県、東京都および神奈川県東部の旧国名。はじめ東山道、771(宝亀 2)東
海道に転属。国府は多摩郡、現東京都府中市に置かれた。多くの渡来人が配され、積極的な開発が展開され
た。平安後期、牧を背景に武蔵七党、板東平氏の中小武士団が輩出。鎌倉時代は頼朝の知行国(関東分国)と
なり、北条氏嫡流が国司と守護を兼ねる。室町・戦国時代は変動が激しく、鎌倉公方上杉氏、そして後北条氏
の傘下となったが、徳川家康の江戸開幕により大部分は天領、旗本・譜代大名領となる。明治初期に 1 府 2
県に分かれ、現在にいたる。(*12)和名類聚抄によると、武蔵国は、久良(くら)、都箱、多摩、橘樹、荏
原……とあり、初期に、多摩郡は小川、川口、小楊、小野、新田、小島、海田、石津、狛江(こまえ)、
勢多の 10 郷を管轄していた。
- #11-1 「多摩と多磨」と「谷保」の読みについて 多磨の「磨」は万葉集、延喜式、拾芥抄は、「多摩」とし、
続日本後記、風土記には「多摩」と見え、和名抄、東鑑(吾妻鑑)には「摩」の字を記せり。字体異なれ
ども通用して字義にかかわざれど、和名抄は和訓のよりどころとすべきものなれば、これに従う。武蔵名
勝図会 の例として植田猛緡が説明している。江戸時代までの古文書では、多摩郡とも多磨郡とも混在し

て使用されている。明治以降は多摩で統一されている。谷保の読みについては、地元の人は「ヤボ」と呼んでいたようである。資料では、旧谷保地域を示すときは、ヤボムラ、下谷保はシモヤボとしている。

#12 小楊郷 【おやぎごう】 国立市域が、多摩郡のいずれの郷に所属していたかについて、天保元(1830)年徳川幕府によって編纂された『新編武蔵風土記稿』には「小楊郷は今其名残れるを知らず。或いはいふ府中領青柳村ならんと、されど正しく是なりとおもわれず」と、小楊郷を府中領青柳すなわち現在の国立市谷保の地に比定する説を提示している。この説は小楊郷が『和名類聚抄』*31によれば乎也支=おやきと読み、青柳に通じることによると思われるが、『新編武蔵風土記稿』自身が疑問を示しているように、確定する史料に欠ける。なお『大日本地名辞書』#31も小楊郷を青柳を中心に谷保・立川・大神・拝島にわたる古地名かとしている。(*2中巻 P762)

#13 板碑【いたび】 中世に造られた石塔の一種。板石塔婆とも。両親の追善や生きている者の逆修のために造られた供養塔で、埼玉県江南町の 1227(嘉禄 3)銘のものが初見。南北朝・室町時代に最も盛んとなり、17世紀に姿を消す。(*12)

#14 入会【いりあい】 入合・入相とも。近世、一定の山林原野を一定の集団で共同利用する慣行。入会で利用する林野は入会山という。(*12)

#15 新田開発【しんでんかいほつ】 近世に、新たに用水路を開鑿したり、溜め池を築いたり、河道を付け替えたり、湖沼や干潟を干拓したりして、ある程度まとまった広さの耕地を開発すること。また、そうしてできた村を新田村とよぶ。近世、とくに前期には各地でさかんに行われ、中期までに耕地面積は 1.4 倍位に増加したといわれている。(*12)

#16 寄合【よりあい】 中世惣村の百姓等の衆議。村の構成員の合議によって運営され、出席は義務で、欠席は罰せられた。乙名(おとな)層の指導で村のお堂や神社、屋外などで開催され、決定は多数決(多分之儀)によった。開催日は不定だが、年貢納入の時期には開かれていた。(*12)

#17 組合村【くみあいむら】 江戸時代に村々が連合して組織した村々組合のこと。広くは前代以来の伝統を継承しながら江戸時代を通じて存在した各種の村連合や、領主支配にかかわって組織された村々組合をさす。(*2)

#18 地租改正【ちそかいせい】 明治政府によって 1873 年の地租改正条例で全国的に実施された土地改革。江戸時代の農民の土地保有に対し、土地所有区画の決定と地価算定を行い地券を発行してその私的所有権を認定した。(*12)

#18-1 絵図【えず】 明治初期の地租改正に際して作成された、田畑の面積、位置などを記した絵図。(*13)

#19 飛地【とびち】 飛入ともいう。同じ行政地画に属するが、新田開発で、本村から離れ、他に飛び離れて存在する土地。本村と地続きでない他村内へ入り組んだ耕地。(*13)

#23 国衙【こくが】 律令制で、国司が政務をとった役所。諸国の役所。8 世紀末から使われる呼称で、諸国に宛てた牒式文書の宛所脇付に〈衙〉と記す用法から一般化したものとされる。平安時代には国司の管轄する国、あるいは国府の行政組織の総体をさすようになり、国衙内部には分局としていくつかの〈所〉が組織されて雑色人・在庁官人により運営された。国司遥任が一般化すると、国の現地の行政機構は留守所るすどころと称され、受領ずりようの意を受けた目代もくだいに統括された。平安後期からは国衙への上番を通して在地武士の結集も見られ、鎌倉時代には幕府が諸国の国衙機構を支配下に組み入れて各地を把握した。(*12)

#31 和名類聚抄【わみょうるいじゅしょう】 和名を付した意味分類体の漢語辞書。和名抄・倭名類聚抄とも。源順(みなものしたごう)撰。承平年中(931 - 938)成立。醍醐天皇女勤子内親王の命によって作られた。10 巻と 20 巻本の 2 系統があり、20 巻本では、巻 5～巻 9 には国名・郡名・郷名が挙げられ、当時の行政地名を網羅する。〔諸本集成和名類聚抄〕(*13)

#37 講【こう】農業や養蚕の組合、消防団、青年団などの組織を作っていた。またムラにある講中という
まとまりは人寄せに使う食器や結婚式、葬式などの道具を共通に使っていて、それを保管する講中蔵を
もっていた。(*19)

6 出典・参考資料 ([]内の図書記号は 国立市中央図書館、() は中央公民館)

- 1) くにたちの歴史 編纂 国立市 平成7 (1995) 年 [10/B1]
- 2) 国立市史 上中下 編纂 国立市 昭和63 (1988) 年 [10/B1]
- 5) わが町国立 原田重久 迷水亭書屋 昭和50 (1975) 年 (291)
- 11) 広辞苑第5版 三省堂 1998年 [R813]
- 12) 岩波日本史辞典 岩波書店 1999年 [R210]
- 13) 日本史用語大辞典、日本史用語辞典 柏書房 1979年 [R210]
- 20)-3 国立の生活誌Ⅲ谷保の講中倉と講 昭和60年くにたちの暮らしを記録する会国立市教育委員会
[10/D1]
- 22) 日本歴史地名大系13 (東京都の地名) 平凡社 2002年 [R291]
- 25) 国立市都市計画マスタープラン 2003年 国立市 [S1]
- 27) 角川日本地名大辞典 13 東京都 角川書店 昭和53(1978)年 [291]
- 28) 明治39年測図 1:20,000 府中 [01/C2]
- 31) 大日本地名大辞書 吉田東伍 筑摩書房 1968年 [291]
- 40) -1 府中市内旧名調査報告書 道・坂・塚・川・堰・橋の名前 府中郷土博物館 [34C3]
- 52) くにたち公民館の誕生 町づくりと公民館 国立公民館 2008年